

授業改善のためのFD

— 2024年度の報告 —

原 百年・金丸 巧・中山 由佳・藤原 史織・村上 智子・李 娜

本稿は、2024年度に実施されたグローバルラーニングセンターのFD活動を報告するものである。まず、今回報告するFDが行われることになった背景を述べる。次に、「日本語コース(Sレベル)の開発」、「語学授業105分対応」、「国際共修Can-Do」という3つのワーキンググループに分かれて行われたFDの概要およびその報告を順にみていく。そして最後に、2025年度に向けた展望を述べる。

キーワード：FD，日本語教育，105分授業，国際共修

1. 新たなFD方針の背景

本稿で報告するFDは、2024年1月に示された新たな大学のFD方針に従い、計画・実施されたものである。大学の方針として強調されたのは、「FDの第一目的は授業改善である」、「FD＝研修会ではない」ということである。そして、FDの責任主体を学部・センターとした。2024年度からは各学部・センター内にFD担当教員を配置し、各学部・センターが責任主体となり、それぞれFDを企画・運営することとなった。

グローバルラーニングセンター(以下GLC)では、「日本語コース(Sレベル)の開発」、「語学授業105分対応」、「国際共修Can-Do」という3つの分野のFDを計画した。以下では、それぞれの分野のFDの概要と実施報告を簡潔に述べていくこととする。

2. 「日本語コース(Sレベル)の開発」報告者：金丸巧・藤原史織・李娜

2.1. FD活動の目的と概要

本FD活動の目的は、2024年度から開始したSレベル(大学生活を送るために必要な基礎日本語力の補強を要するレベル)の日本語科目における教育内容、方法、教材の妥当性を検討し、次年度に向けて改善していくことである。そのために、Sレベルの日本語科目(「日本語I・II」「日本語特講I・II」)履修者および科目担当教員を対象としたインタビュー調査を実施した。5月～7月に質問項目(表1参照)を洗い出し、7月～8月にかけて留学生15名、教員7名に対面またはオンラインによるインタビュー調査を実施した。9月には、後期授業の教材や方法の一部に調査から得られた結果を反映し、改善を行った。11月以降は、2025年度のシラバス作成に向けて、本FD活動の結果をまとめた。なお、インタビュー調査は、協力者に対し、研究目的および個人情報保護に関する説明を口頭で行い、書面による同意を得た上で実施した。

表1 インタビュー調査項目

留学生		教員	
授業内容	・ レベル、充実度、内容の興味深さ	授業内容	・ レベル、充実度、内容の興味深さ
授業の 進め方	・ 進度、学習項目毎の分量、活動形態の適切さ	授業の 進め方	・ 進度、学習項目毎の分量、活動形態の適切さ
教科書・ 教材	・ レベル、練習等の分量の適切さ	教科書・ 教材	・ レベル、練習等の分量の適切さ、内容の興味 深さ
評価	・ テストの回数や難易度の適切さ	コースの 位置付け	・ コンセプト、到達目標、評価方法の適切さ

2.2. FD活動のまとめ

本FD活動を通して得られた本学留学生に適した日本語コース開発に必要な視点を述べる。

まず、今年度の「日本語I・II」(Sレベル)では、4技能全般を伸ばし、基礎的な日本語力が身に付けられるよう総合教科書を用いた授業を実施したが、授業内容や教科書に関する学生および教員の回答から、学生の関心や学修スタイルとの間にズレがあったことが分かった。標準的な内容・方法ではなく本学留学生の特徴を柔軟に取り入れることが必要である。

次に、学生および教員の回答から、個々の学生がどのような点に関心を示していたのかを知ることができた。また、授業活動と学生生活を結び付けて捉えている学生の声もあった。学生からは、教科書で扱ったトピック、コミュニケーションや作文の活動に対して、面白い、役立ったという意見があった。授業の中で学生の関心やニーズを捉え、教員間で共有することが必要である。

最後に、インタビューを通して、コース(Sレベル)のコンセプトが教員間で十分に共有できていないという実情が明らかとなった。また、授業計画と教室内の現実とのギャップも生じていた。現実 に即した形で目的を明確にするとともに、教員間でその目的を共有し、さらには学生の状況に即した形で更新を続けていけるような協働的な体制が必要である。

以上が本FD活動のまとめである。この活動で得られた視点を参考に、目の前の学生をよく捉え、協働的な体制のもと、今後も日本語コースの開発、改善を継続していきたい。

3. 「語学授業105分化対応」報告者：中山由佳・村上智子

3.1. 「語学授業105分化対応」の経緯およびFD計画の概要

山梨学院大学において2025年度より1コマ105分授業に移行することを受け、GLCでは、「語学授業105分化対応」FDのワーキンググループ(以下WG)が発足した。本FDの目的は、①到達目標に合致した13週のシラバスが作成できるようにすること、②学生の学習意欲を向上させ、学生の学びを促す授業になるように授業計画を再検討することの二点である。この目的のもと、FDの実施内容を①語学授業で105分化を行う際の課題の洗い出し、②学びを促す105分授業実践に関する情報収集・整理、③授業デザインにあたり考慮すべき点のリスト化、④105分授業のシラバス案および授業デザインシートの作成・共有と設定し、実施した。

3.2. FD活動のまとめ

4月から5月にかけては、語学授業の105分化に伴う課題の検討が行われた。初回のWG会議では、本FDの実施スケジュールおよび内容の確認が行われ、方向性を確認した。また、105分になることによるメリット、デメリットなどについても議論を行った。

6月から7月にかけては、105分化対応に関する情報収集を行った。具体的には他大学で発行している実践例集や100/105分授業に対する学生の反応に関する論考、さらに6月26日に本学で実施された全学FD研修会「2025年度から開始される授業の105分化について」の動画及び資料などである。

9月から11月は、授業デザインを行うにあたって考慮すべきことをリスト化した「105分授業デザインチェックリスト」を作成し、WG内で共有した。このチェックリストは、「13週シラバス作成の重要なポイント」(5項目：①到達目標は13週で測ることができる目標になっている、②目標と評価方法が合致している、③評価方法が適切である、④学習目的に合わせた学習課題が設定できている[内容や頻度が適切かどうか]、⑤学習課題と活動がディプロマ・ポリシー(DP)に対応している[伝え合う力])と、「1回(105分)の授業のチェックポイント」(8項目：①学習者の学びを促す学習活動を入れている、②学生の学習意欲を喚起するための工夫を入れている、③各授業回の到達目標が明確になっている、④授業の流れが適切である[定着を図る流れになっているか]、⑤集中力を保つ工夫を取り入れている、⑥学生の参加を促している[学生が主体的に学べるようなデザインかどうか]、⑦授業外の学習課題を適切に設定できている[自律学習を促しているか]、⑧効果的なフィードバックがデザインできている[教師→全体、教師→個別、学生同士])の2部構成で作成した。また、チェックリストには、インストラクショナル・デザイン(以下ID)の観点も一部取り入れており、授業デザインを検討する際の参考となるよう工夫した。

11月中旬からは、日本語、中国語、英語のシラバス案を作成し、WGで共有した。その際、上述の「105分授業デザインチェックリスト」に照らして検討を行った。その後、日本語、中国語、英語の各言語の1回分の授業デザインシートを作成し、WG内で共有を行った。105分授業のデザインを検討するにあたり、IDのひとつであるARCSモデルを活用し、学習者の学習意欲向上の観点からも慎重に検討を重ねた。授業デザインにおいてなされた工夫としては、①各活動の時間を長めにとること、②集中しやすい時間配分にすること、③文化紹介など、リラックスできるものを含めること、④飽きないように多様な活動を入れること、⑤学生の関心を引きやすい内容を授業の冒頭に配置すること、などがあった。本FDの成果はシラバス作成や授業デザインの参考としてもらうべく、2月上旬にGLC内で共有を行った。

4. 「国際共修Can-Do」報告者：原百年

4.1. 「国際共修Can-Do」の経緯およびFD計画の概要

国際共修科目は、到達目標として①関心をもってクラスメイトの言語的・文化的な多様性を知ることができる(多様性を知る)、②活動を通じて異なる背景をもつクラスメイトとお互いに教え合い、学び合うことができる(共修する)、③自覚的かつ具体的に自分の行動や態度を見直すことが出来る(内省する)という3つの能力の獲得を目指している。これらの到達目標は、比較的抽象度が高いゆえに、授業内容の組み立てに幅を持たせることが出来るメリットがあるが、具体的にどのような能力が問われているのか漠然としているという弱点を持つ。到達目標に対応した評価ルーブリックではある程度具体的な能力が示されているものの、実際の運用ではま

だまだ不十分だといえる。そこで、より具体的な「国際共修Can-Do」のリストを作成するFDが計画されることとなった。

全4回のFDが計画され、国際共修科目を担当する教員5名が参加した。第1回は、国際共修のカギとなる「教え合い、学びあう」という授業スタイルに注目しつつ、各自が担当する国際共修科目の授業内容を紹介し合った。第2回は授業内容に基づき、どのような「共通するCan-Do」が在りうるか検討し、リストアップした。第3回は第2回の継続で、「科目独自のCan-Do」を検討した。最後となる第4回は、「多様性を知る」「共修する」「内省する」という3つの能力で挙がってきたCan-Doリストを「基礎」と「発展」に分ける作業を行った。

4.2. FD活動のまとめ

4回のFDで目指したのは、国際共修科目の到達目標に合わせたCan-Doリストを作成することであった。結果として50以上の異なるCan-Doがリストアップされたのは、ひとつの成果であった。すべてのCan-Doを紹介するのは紙面上不可能なので、以下でその一部を紹介する。

「多様性を知る」という能力に関して挙げられたのは、①「自分自身と自分自身が属する文化を紹介できる」、②「違い、多様性を認識できる」、③「違い・多様性を探求できる」というCan-Doのカテゴリーで、①が最も難易度が低く「基礎」に位置づけられ、②と③の多くが「発展」に位置づけられることが確認された。「共修する」という能力に関して挙げられたのは、①「自分の知識や考えを言語化し、分かりやすく説明できる」、②「他者に配慮しつつ、意味ある対話（対話のキャッチボール）ができる」、③「伝え合った知識や考えを自分なりにまとめ、説明できる」、④「伝え合った内容をもとに、新たな価値観や考えに発展させることができる」というCan-Doで、①が「基礎」に位置づけられ、②から④は「発展」に位置づけられることが確認された。「内省する」という能力に関しては、「授業での活動内容を説明できる」、「自分自身の活動を客観的にふり返ることができる」などのCan-Doが挙げられた。

話し合いを進める中で分かってきたことのひとつに、「多様性を知る」と「共修する」という能力に関し、共通して「傾聴力」が必要だということである。従って、「他者の意見を否定せずに、耳を傾けることができる」、「相手を見ながらよく話を聴いて、相槌をうつなどのリアクションができる」といった傾聴力に関するCan-Doが多く挙げられた。

5. 2025年度に向けた展望

2024年度は、3つのWGに分かれ、それぞれ異なるスケジュールや方法で一連のFDを行った。本報告で見てきたように、出されたアウトプットは当然異なる。2024年度で得た成果をもとに、「FDの第一目的は授業改善である」という共通認識のもと、それぞれのWGで2025年度のFDを計画していく予定である。今後も、少しでも授業改善に役立つFDを目指していきたい。

HARA Momotoshi・KANEMARU Takumi・NAKAYAMA Yuka・FUJIWARA Shiori・
MURAKAMI Tomoko・LI Na